2028年1月1日

公益社団法人埼玉県診療放射線技師会
会長　田中　宏

明けましておめでとうございます。

今日は2028年元旦である。

子供たちが帰郷し、久しぶりに家族全員で懐石料理を食べに行った。ここは今では珍しくオーダーや会計は人が行う。ファミレスのほとんどが料理を運ぶ以外は無人化し、たまには人のぬくもりを感じ良いものである。10年前からは考えられないほどAI（artificial intelligence）は普及している。

今から10年前の2018年は、自動運転技術に関するAIが実用化され始めたが、今では性能の差がありつつも、軽自動車にも標準装備されている。任意保険もAI搭載により保険料が値引きされるプランが当たり前になっている。

その他では、スーパーのレジは無人化され、警備員もオートセキュリティやロボットが巡回している。ホテルのフロントは、高級ホテル以外で自動音声案内と指紋認証でチェックインやチェックアウトが可能になった。銀行融資担当においては、信用による融資判定を除く少額融資はAIが判定するようになっている。この10年で多種の仕事が合理化されている。

医療の世界も例外ではない。受付業務は外来診察時に医師からもらったICカードで各検査の受け付けを行う。院内ではICチップをかざし、音声認識機能を持つスマートスピーカーが的確な案内をするので、空いているところから効率よく受診できる。画像診断分野では、主訴と症状を入力すると検査法や撮影法を提案する機能が電子カルテにオプションで装備される。主治医はそのオーダーを追認するか修正を加える作業を行う程度である。一歩間違えると、診療放射線技師（以下、技師）はAIのオーダーに従って検査や撮影を行うことになる。

そしてAIを使った遠隔診断が普及し、クリニックや小規模病院では高頻度で利用されている。高機能のAIを使用している会社から、ジェネリック型のAIを使用している会社までさまざまである。画像診断の場合、問題は診断者であり、AIは判定ができても診断者にはなれない。放射線科医が関与するシステムから、依頼医が責任を負うシステムであったりニーズに合わせた各種プランが用意されている。高機能AIでは推測される疾患名だけでなく、選択される治療法まで提案される。

技師は病院に勤務するのが一般的であったが、遠隔診断システムの会社に勤務する技師も増えた。10年以上前には技師の読影の補助が推進されていたが、病院に勤務する技師には読影能力よりもAIに読ませる画像が適切かどうかの検像が重要になる。遠隔読影の会社に勤務する技師は、検像能力の他にアウトプットとして結果の管理、つまり読影能力が求められる。

10年前医療にAIがやってきたとき、AIのイン・プットとアウト・プットおよびオーダーに対する疑義照会に技師が積極的に関与してきたからこそ、今を何とか生き残ることができているが、そうでなければAIの判断に使われる診療放射線技師になっていたに違いない。